

#### (4) 鱒の好漁

本年度は予想外に早くから来遊し既に5月下旬～6月上旬南西海域で全体の30～40%程度を漁獲した。(信濃丸)。又6月中下旬アツツ西方でかなり鱒群が見られアリューション海域は予想通り鱒の豊漁型であった。然しオリュートルカラギンについては当初かなり高い豊度と思われたが結果的には沖合に於ては白鮭に比し可成り少い漁獲であった。これから考えれば、魚群の沖合通過が可成り早かったとも判断される。

#### (5) 銀鮭の豊漁

39年度は38年度に引続き銀鮭は比較的好漁であり可成り高い豊度を示した。本年度は各船団共南方銀漁場で銀を漁獲し満も切揚げたが、本年度漁況から判断しても若し仮りに切揚げることなく引続き漁獲したならば、未だ相当量の水揚げがあったものと想像される。

### 6. 1963年北洋さけ・ます漁業に於ける漁・海況の1～2の特徴について

吉原英吉(日本水産株式会社)

本年度の漁海況については既に詳しい説明があったので、ここでは宮島丸船団の操業から見た本年度の1～2の特徴について簡単にのべる。

#### (1) 気 象

昨年秋からの北半球に於ける異常気象の影響が尾を引いて、本年は全漁期間を通じて例年になく天候が不安定であり、時化が多かった。特に操業当初から5月末にかけては、カムチャッカ、千島付近に顕著な気圧の谷が存在し、大陸からの寒気の氾濫が多く、漁場は相次ぐ低気圧の接近発達に

見舞われた。中でも5月25日から27日にかけては急激に発達した低気圧の来襲により、まれに見る大時化となり、網の流失、休漁等多大の被害をうけた。本年の気象の概況について、宮島丸の記録から、35年以降の各年の概況と比較すると表に示す通りである。

### 年度別 休漁日数

		38年	37年	36年	35年
漁場帯在		65日	60日	52日	68日
休漁日数	時化	3	1	0	1
	移動	6	4	5	6
	合計	9日	5日	5日	7日

(注) 船団移動は概ね時化を利用することが多い。

### 風力7以上の頻度(%)

年	5月	6月	7月	計	全観測回数
38	19.8	0	1.5	4.2%	528
37	1.1	1.1	0	0.8	486
36	5.3	0	2.1	1.2	407
35	0	3.4	0	1.5	544

1日のうち10 m/s または 15m/s をこえたことのある日数

年	5月		6月		7月		合 計		観 測 日 数
	m/s 10 以上	m/s 15以上	m/s 10以上	m/s 15 以上	m/s 10 以上	m/s 15 以上	m/s 10 以上	m/s 15以上	
38年	8	4	6	0	5	1	19	5	65日
37	5	0	6	0	5	0	16	0	60
36	1	1	14	0	3	1	18	2	52
35	6	0	12	1	5	0	23	1	68

年度別漁網流反件数及び反数

	38年	37年	36年	35年
流 失 反 数	1,192反	855	891	735
件 数	19	15	13	9

## (2) 海況漁況の特徴

図は1960～1963年5月下旬の75m層の水温分布を示したものである。

本年は漁期始めから暖水の北～西への張り出しが例年になく顕著であつた。さけますの分布も特徴的であり漁期始めから北～西に偏しており、例年中心漁場となる $165^{\circ} \sim 170^{\circ} E$ 、 $49^{\circ} N$ 以南の海域は終始漁場とならなかった。水温分布から見ると、 $3.5 \sim 4.0^{\circ} C$ 線が例年より西～北に伸びており、 $49^{\circ} N$ 以南 $165^{\circ}$ 以東の海域は $3.5 \sim 4.0^{\circ} C$ 以上の暖水域となっている。一方カムチャッカ寄りの冷水は $165^{\circ}$ 以西に存在していて暖水との間に顕著な潮境を形成している。漁場はこの潮境付

近に集約されて、他の海域は終始殆んど漁場とならなかった。漁場がこの様に北偏し、しかも集約されたことは、勿論、漁期漁場を異にして出現する各地方群別資源の来游数量がどうであったかと言う、資源数量的な面も大きな要因となっていると思われるが、漁場形成の環境要因から見ると、北洋に於いて中層水温が冬期間の北洋の水温を反映しているものとするれば、本年は冬期から北洋が温暖であり、水温も高かったために、さけますが例年より南下せず、越冬場所が北に片寄っていったためであろうと考えられる。

海況と漁況及び資源の動向を結びつけて考える場合には、さけますの全生活期間にわたっての海洋観測、特に現在殆んど行なわれていない冬期間の調査を行なう事が望まれる。







